ICTを活用した
教育の実践と課題

第１回目

北海道教育大学　教職大学院　札幌校
福島　耕平

シリーズの全体像と本日の問い

第１回
教育観・学力観の
アップデート
（本資料）

→

第２回

授業デザインの
転換

→

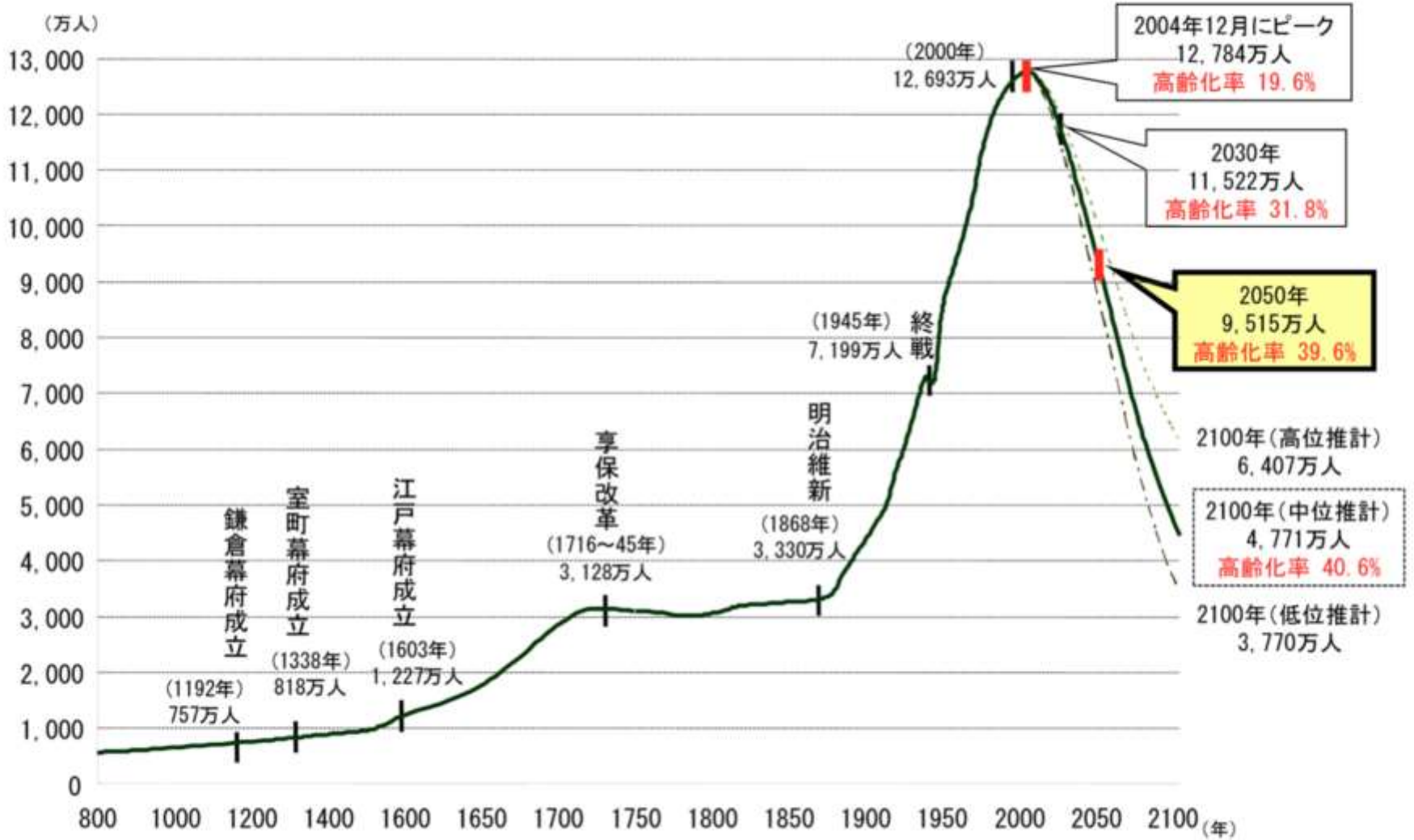
第３回

生成AIとの
協働実践

AIが答えを出せる時代に
学校は何を育てるべきか？

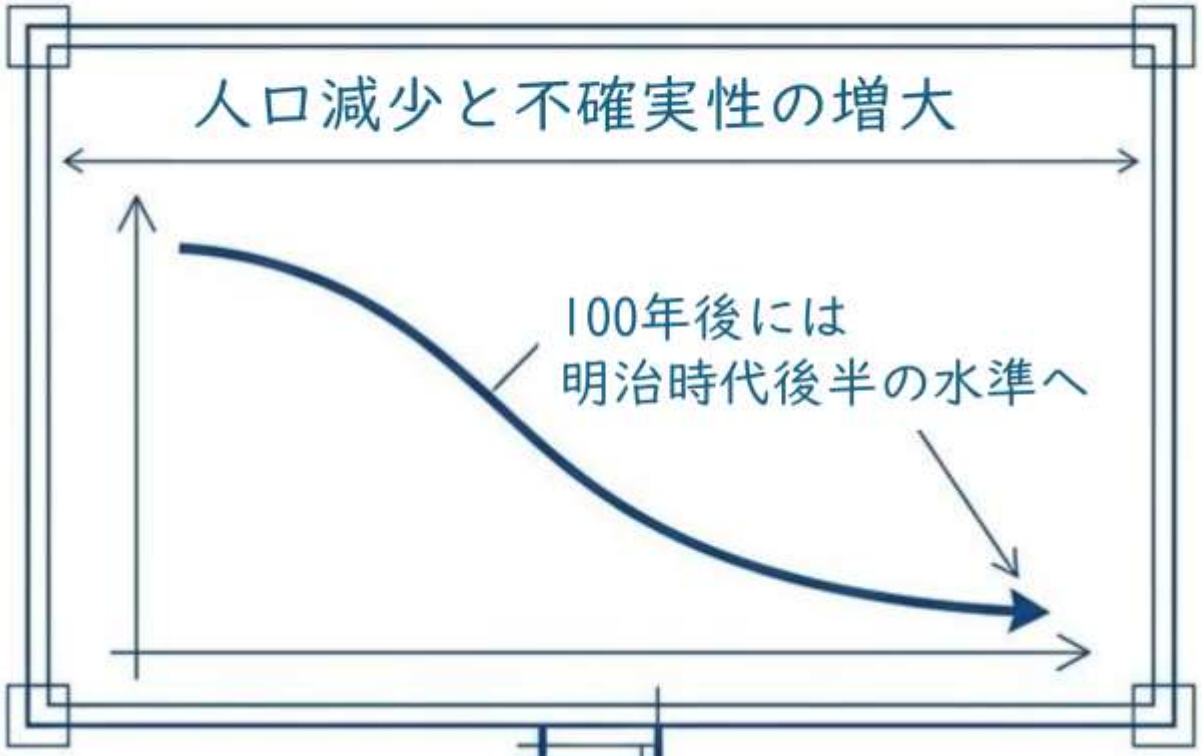
日本の総人口の長期的推移

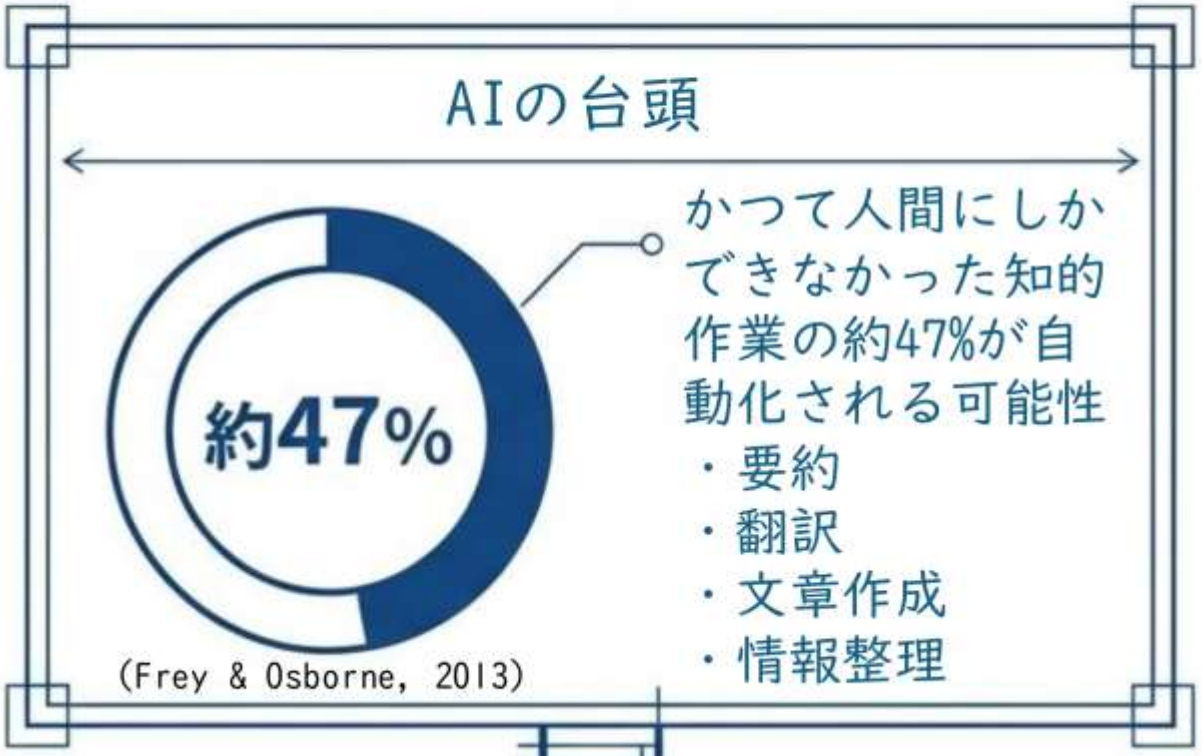
○　我が国の総人口は、2004年をピークに、今後100年間で100年前（明治時代後半）の水準に戻っていく。この変化は、千年単位でみても類を見ない、極めて急激な減少。



「国土の長期展望」中間とりまとめ 概要（平成23年2月21日国土審議会政策部会長期展望委員会）

人口減少・AIの進展が学校教育の前提を変える





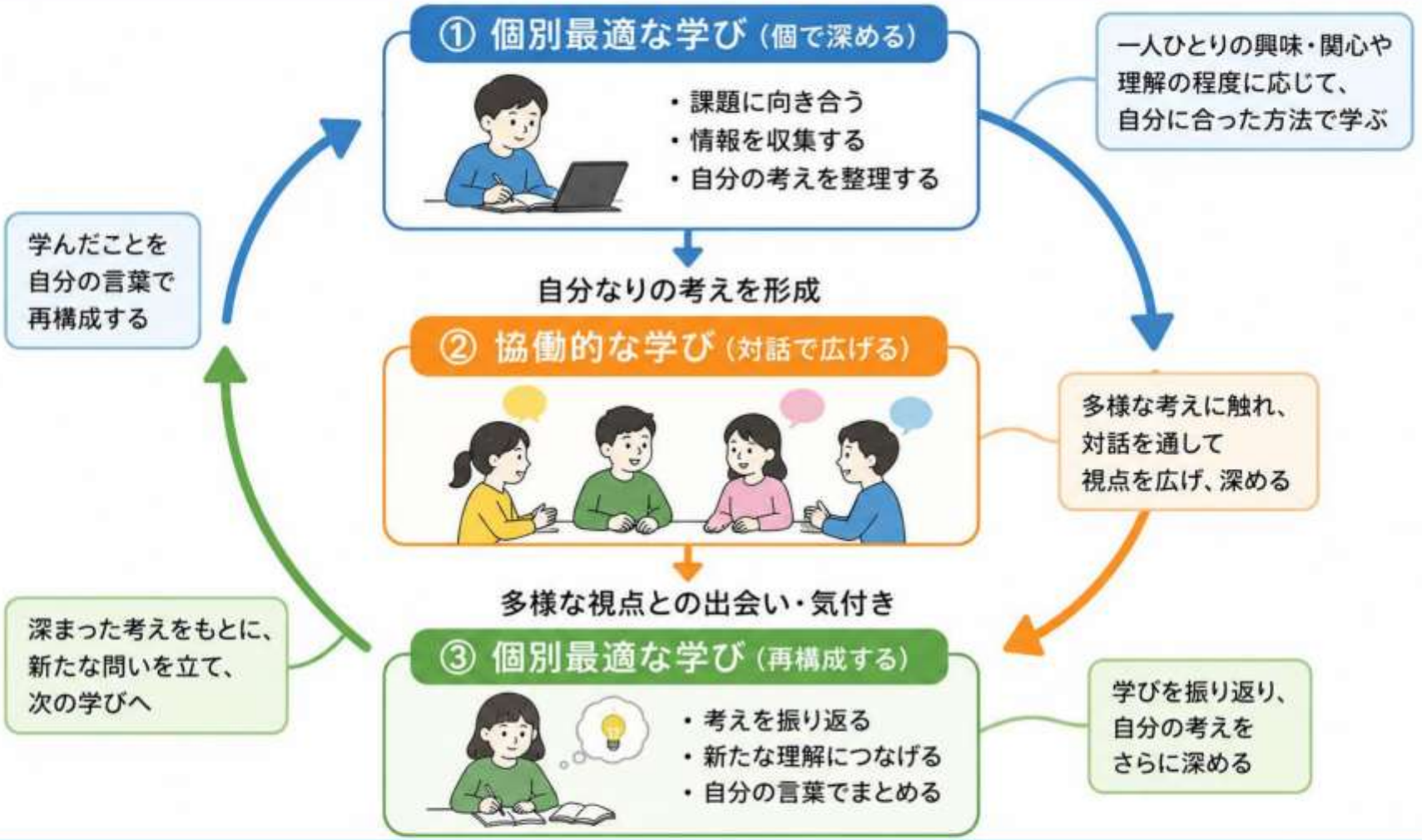
知識の価値が消えるわけではない
しかし知識を持っているだけでは不十分な時代の到来

学力観のパラダイムシフト

これまで		これから
学習の目的 知識習得	⇒	学習の目的 知識活用
評価の基準 正確性	⇒	評価の基準 判断力
思考の方向 再現	⇒	思考の方向 問題発見
到達点 正解	⇒	到達点 多様な解

「正確に覚える」ことから、
「活用し、問いを立て、新たな価値を創る」ことへ

令和の日本型学校教育　二項対立からの脱却



個別最適な学びと協働的な学びは対立しない
個で深め協働で広げる絶え間ない往還サイクル

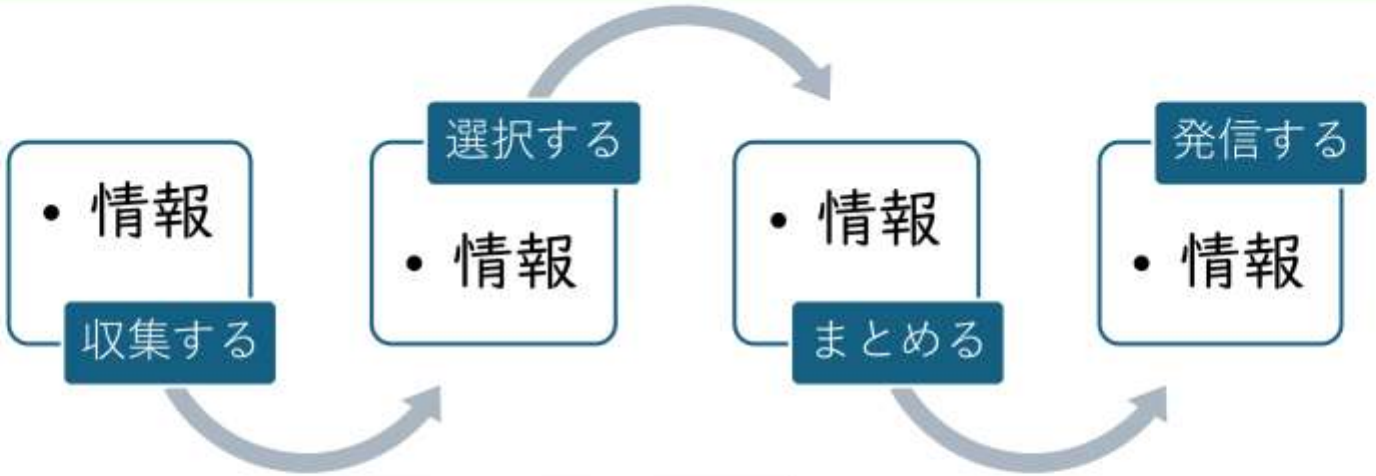
主体性に対する最大の誤解

教師主導　→ 構造化された自己決定　≠ 放任

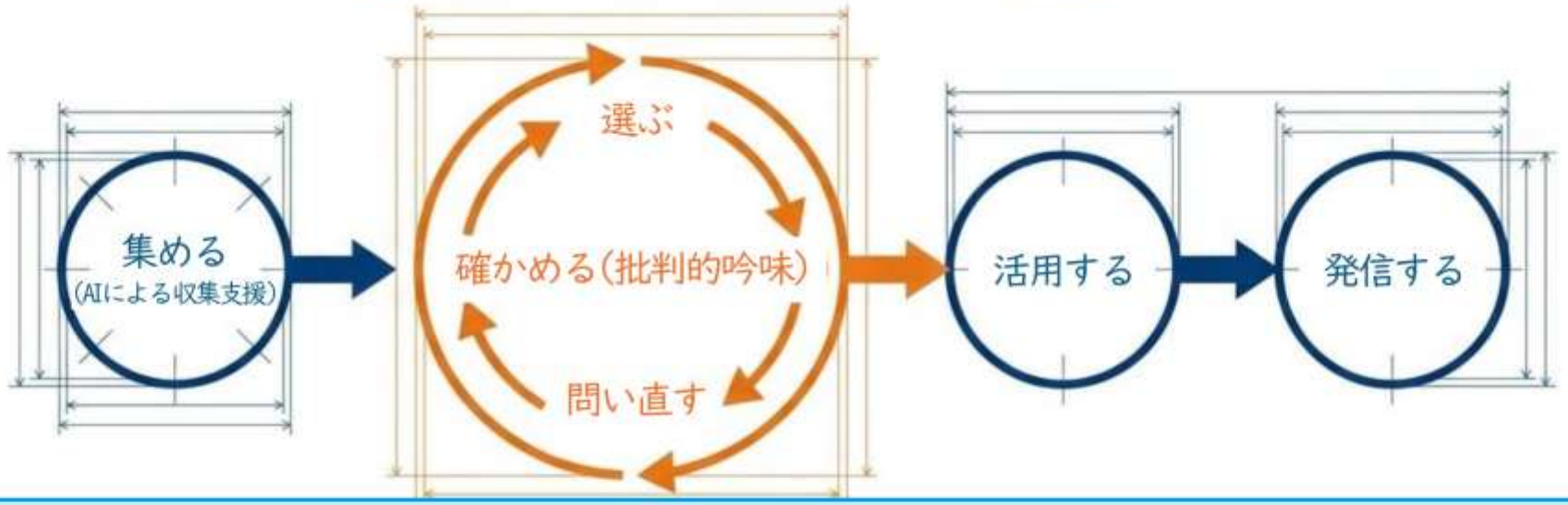
主体性とは自由にさせることではなく教師の意図的な設計のもとで自分で決められるよう支援すること

AI時代の情報活用能力の再定義

これまで

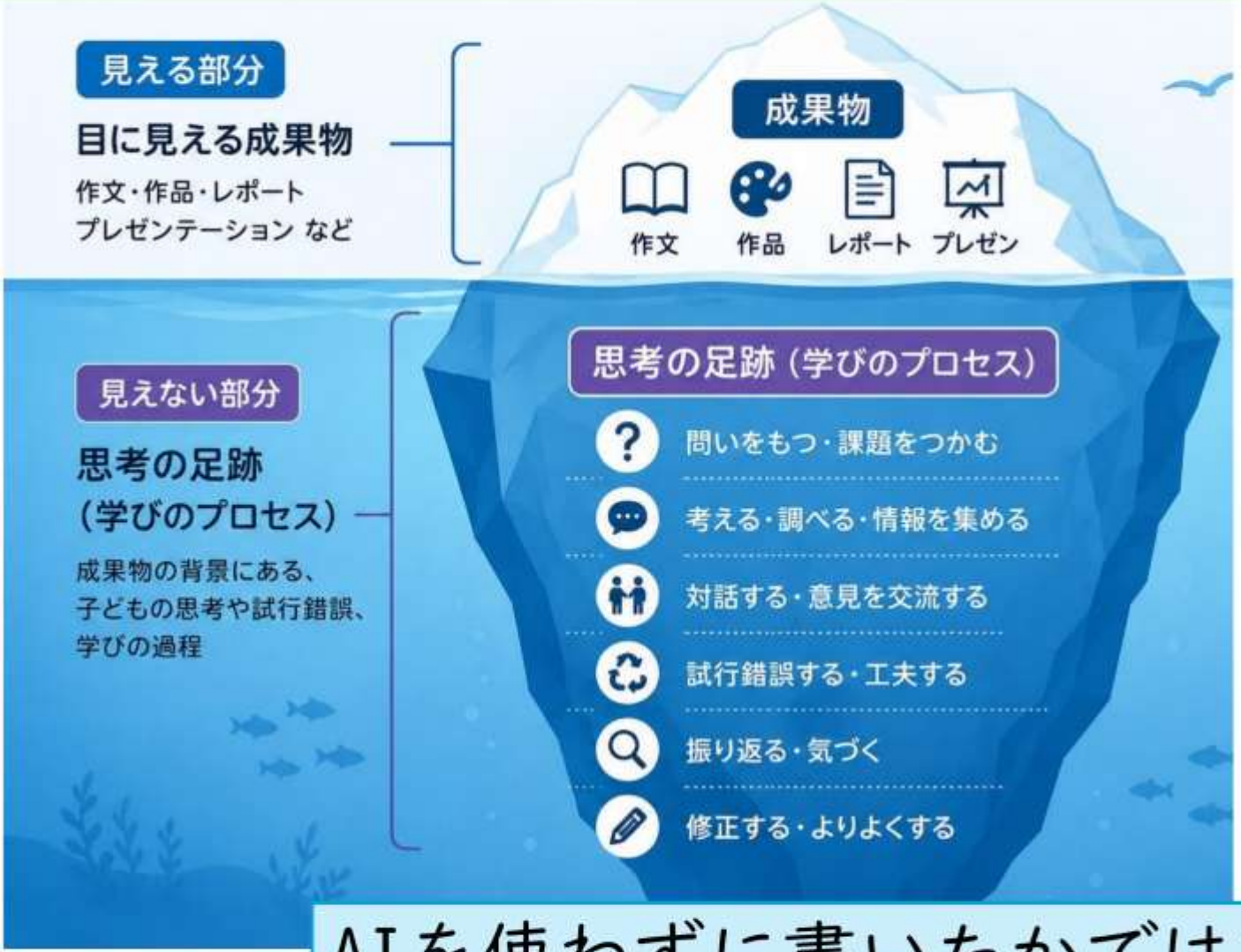


これから



AIが瞬時にまとめる時代
人間には問い直し、吟味する思考の試行錯誤プロセスが重要

成果物から思考の足跡への評価転換

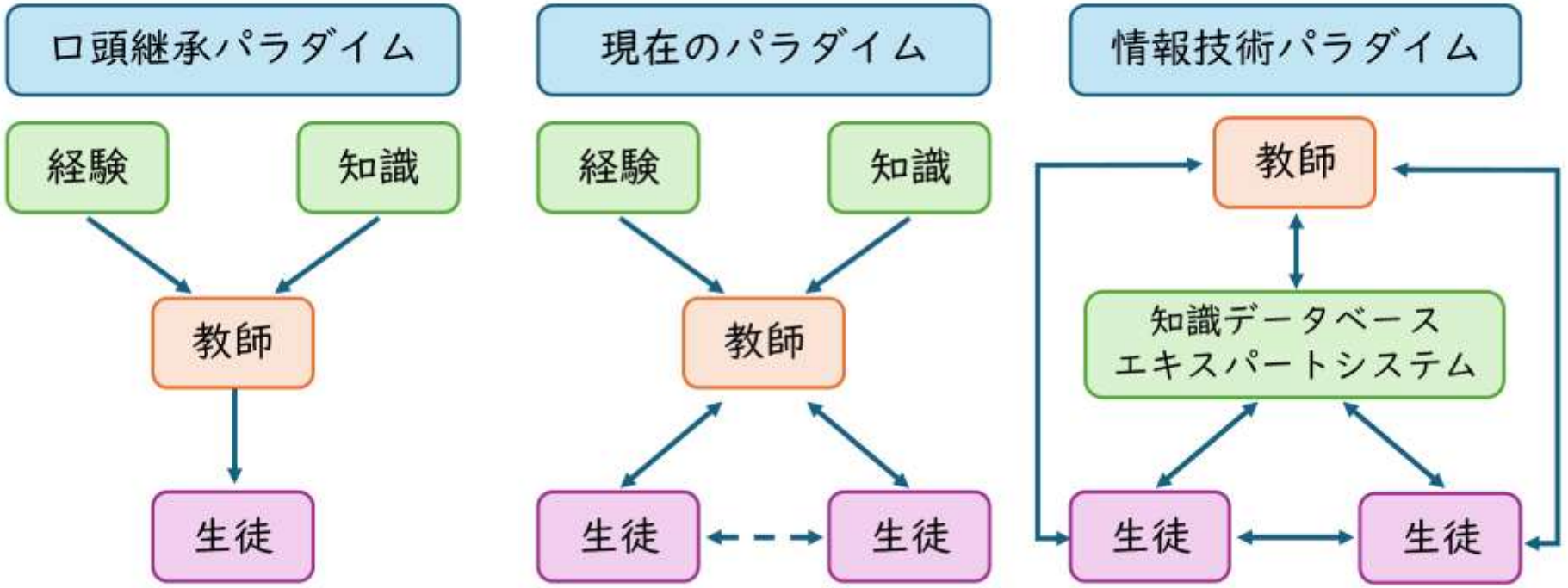


限界を迎える評価
- 完成した成果物中心の評価
- AIによる生成支援
- 能力の空洞化のリスク

これからの評価対象
- 問いからAI回答、
  そして違和感から再度問いへの循環
- 思考の履歴、学習ログ
- 他者との対話による軌道修正

AIを使わずに書いたかではなく
AIを壁打ち相手にどう思考を深めたかを見取る

学校教育の過去・現在・未来



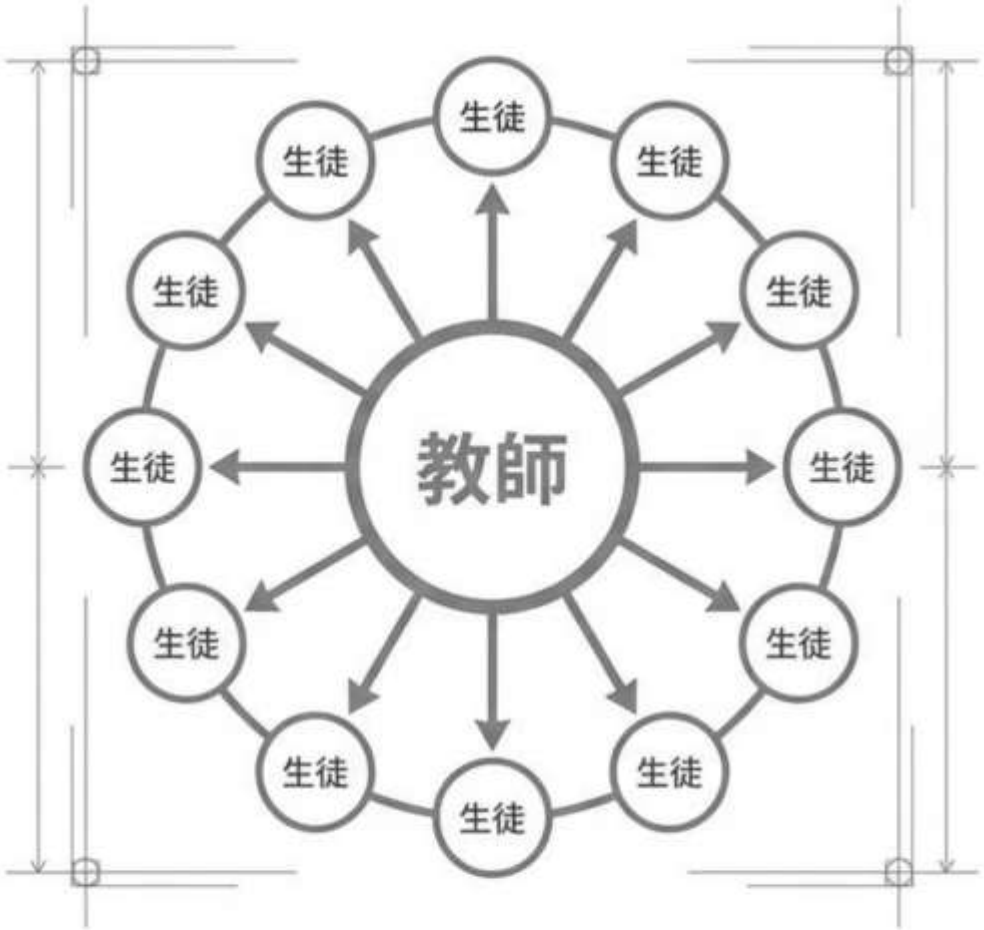
- 口頭による教師の経験や知識の一方的な伝達
- 生徒にとっての情報源は教師
- 生徒同士の相互作用はない

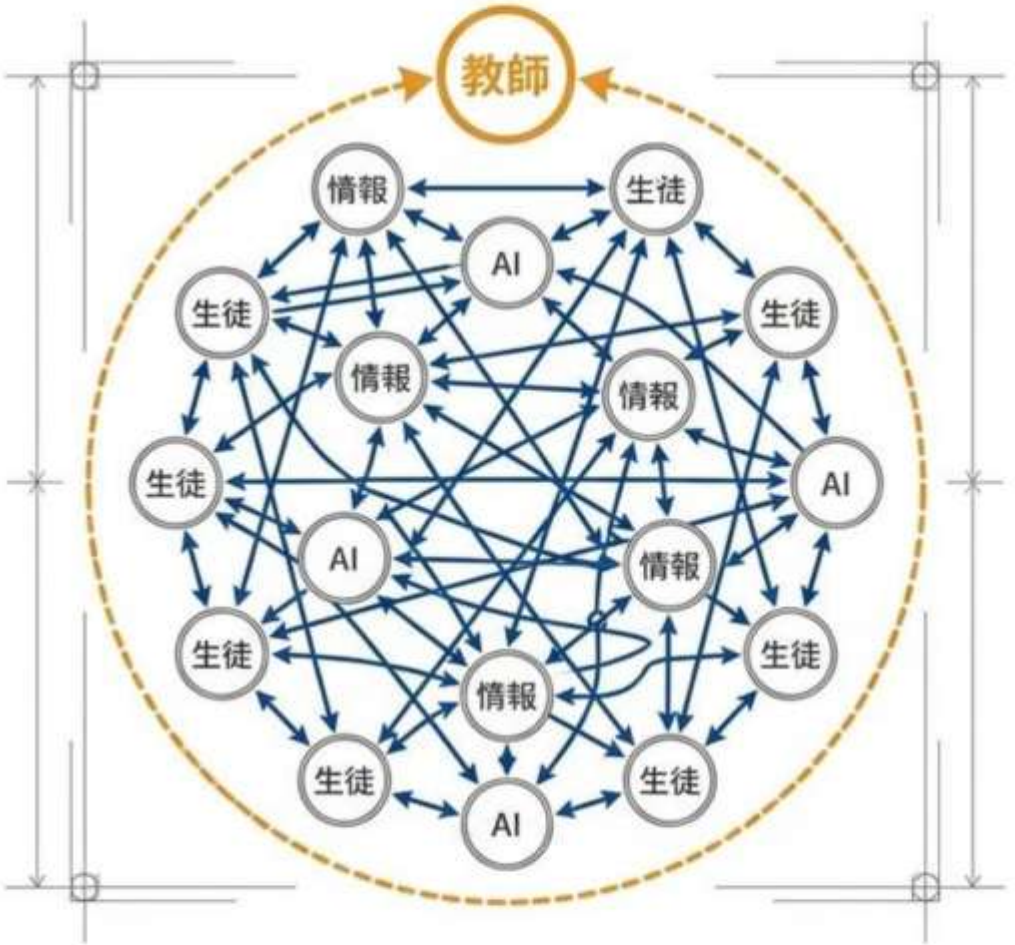
- 情報の伝達者及びゲートキーパーとしての教師
- 教師と生徒には相互作用がある
- 生徒同士の相互作用は二次的なもの

- 知識データベース等に生徒も教師も等しくアクセスできる
- 生徒間、生徒対教師の相互作用はある
- 情報コントローラーとしての教師は姿を消し、生徒と教師が知識データベース等を取り囲む

Robert K.Branson 1990 Issues in the Design of Schooling:Changing the Paradigm.Educational Technology,Vol.30,No.4,7-10

コミュニケーション構造と教師の立ち位置





教師は知識の入口ではなく、学びの環境を設計する存在へ

教師の仕事はAIに奪われるのか

答え　→　ならない

AIの領域

- 即時フィードバック
- 認知負荷の軽減
- 膨大なデータ処理
- 個別課題の提示

見取る

支える

委ねる

人間の領域

- 意味づけ
- 感情の受容
- タイミングを見計らった介入
- 責任の引き受け

TeacherからLearning Designerへ

Learning Designerの5つの視点

1. **見取る**
   子どもの姿や思考を丁寧に見取る
2. **待つ**
   すぐに答えを与えず、子どもが考え抜く時間を確保する
3. **委ねる**
   学びの主役を子どもに委ね、自己決定を促す
4. **支える**
   必要なときに適切に支援し、学びを後押しする
5. **判断する**
   見取った情報をもとに学びの方向性や支援の在り方を判断する

状況に応じて行きつ戻りつしながら、
子どもの学びをデザインしていく

子どもの主体的な学びを支えるために、
教師には「学びを設計する力」が求められる

理念と現実の橋渡し　管理か支援か

AI・データ

学習履歴・行動データ・分析結果 など

技術は中立。
使い方によって、
子どもの未来が大きく変わる。

管理

統制・監視・効率を優先する使い方

- 一斉指導・画一的な評価
- 行動の監視・可視化
- 数値による順位付け・比較
- 選択の制限・型にはめる指導
- 子どもを「管理の対象」として扱う

子どもの主体性が育ちにくい社会へ

教師の専門的判断

一人ひとりの子どもを見取り、
文脈を理解し、
最善の選択をする

支援

主体性・成長・学びの質を高める使い方

- 個に応じた学び・多様な選択肢
- 興味・関心の発見と伸長
- 試行錯誤を促し、自己決定を支える
- 対話・協働を通じた学びの深化
- 子どもを「可能性のある存在」として信じる

子どもの主体性が育ち、未来を切り拓く社会へ

未来を決めるのは、技術ではなく、
教師の眼差しと関わり方

次への接続と実践への落とし込み

本日はなぜ教育が
変わらなければならないかという
マクロな視点を共有しました

では
この新しい学力観を
実際の教室でどう実装するのか

→
次回 第２回では
1人1台端末を活用した授業デザイン

端末活用は目的ではありません
新しい学びをどうデザインするかを
一緒に考えてきたいと思います